



大妻多摩中学校

二〇二〇（令和2）年度

## 入学試験問題（第三回）

### 【国語】

時間 50分

2月4日（火）

#### 【注意事項】

- 1 問題は18ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一 次の文章を読んで後の問に答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしています。字数制限がある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

研究に限らず、大事業の成功に必要な三要素として、日本では昔から「運・鈍・根」ということが言われている。科学者の伝記を読むと、その人なりの「運・鈍・根」を味わうことができる。

① 「運」とは、幸運(チャンス)のことであり、最後の神頼みでもある。「人事を尽くして天命を待つ」と言われるように、あらゆる知恵を動員することで、逆に人の力の及ばない運の部分も見えてくるようになる。人事を尽くさずにポーツとしているだけでは、チャンスを見送るのが関の山。運が運であると分かることも実力のうちなのだ。

次の「鈍」の方は、切れ味が悪くてどこか鈍いということである。最後の「根」は、もちろん②のことだ。途中で投げ出さず、ねばり強く自分の納得がいくまで一つのことを続けていくことも、研究者にとって大切な才能である。論文を完成させるまでの数々の自分の苦勞を思い出してみると、「最後まであきらめない」、という一言に尽きる。山の頂上をめざす登山や、ゴールをめざすマラソンと同じことである。

③ それでは、なぜ「鈍」であることが成功につながるのだろうか？ 分子生物学の基礎を築いたM・デルブリュック(一九〇六―八一年)は、「限定的いい加減さの原理 (the principle of limited sloppiness)」が発見には必要だと述べている。

もしあなたがあまりにいい加減ならば、決して再現性のある結果を得ることはなく、そして決して結論を下すことはできません。しかし、もしあなたがちょっとだけいい加減ならば、何かあなたを驚かせるものに出合った時には……それをはっきりさせなさい。

つまり、予想外のことがちよつとだけ起こるような、適度な「いい加減さ」が大切なのである。このように少しだけ鈍く抜けていることが成功につながる理由をいくつか考えてみよう。

第一に、④「先があまり見えない方が良い」ということである。頭が良くて先の予想がつきすぎると、結果のつまらなさや苦勞の山の方にばかり意識が向いてしまつて、なかなか第一歩を踏み出しにくくなるからである。

第二に、「頑固一徹」ということである。⑤とも言われるように、多方面で才能豊かな人より、研究にしか能

のない人の方が、頑固に一つの道に徹して大成しやすいということだ。誰でも使える時間は限られている。才能が命じるままに小説を書いたりスポーツに熱中したり、といろいろなことに手を出してしまうと、一芸に秀でる間もなく時間が経つてしまう。私の恩師の宮下保司先生(脳科学)は、「頑固に実験室にこもる流儀」を貫いており、私も常にこの流儀を意識している。

第三に、⑥「まわりに流されない」ということである。となりの芝生はいつも青く見えるもので、となりの研究室は楽しそうに見える、いつも他人の仕事の方がうまくいっているように見えがちである。それから、科学の世界にも流行廃りがある。「自分は自分、人は人」とわり切つて他人の仕事は気にかげず、流行を追うことにも鈍感になった方が、じつくりと自分の仕事に打ち込んで、自分のアイデアを心ゆくまで育てていけるようになる。

第四に、「牛歩や道草をいとわない」ということである。研究の中では、地味で泥臭い単純作業が延々と続くことがある。研究は決して効率がすべてではない。研究に試行錯誤や無駄はつきものだ。研究が順調に進まない、せつかく始めた研究を途中で投げ出してしまいがちである。⑦成果を得ることを第一として、スピードと効率だけを追い求めている、傍らにあって、大発見の芽になるような糸口を見落としてしまうかもしれないのだ。寺田寅彦は、晩年に次のように書いている。

所謂頭のいい人は、云わば脚の早い旅人のようなものである。人より先きに人の未だ行かない処へ行き着くことも出来る代りに、途中の道傍或は一寸した脇道にある肝心なものを見落す恐れがある。頭の悪い人脚ののろい人がずっと後からおくられて来て

訳もなく其の大事な宝物を拾って行く場合がある。(中略)

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。凡ての行為には危険が伴うからである。怪我を恐れる人は大工にはなれない。失敗を怖がる人は科学者にはなれない。(中略)

頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思いい利口だと思う人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚な赤裸の自分を投出し、そうして唯々大自然の直接の教にのみ傾聴する覚悟があつて、初めて科学者にはなれるのである。併しそれだけでは科学者にはなれない事も勿論である。矢張り観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは云う迄もないことである。

つまり、頭が悪いと同時に頭がよくなくてはならないのである。

あえて「鈍」に徹して失敗を恐れないことが、科学者には必要なのだ。科学とは、「未知への挑戦」という最大の冒険なのだから。

(酒井邦嘉『科学者という仕事』(中公新書))

問1 — 線部①「『運』とは、幸運（チャンス）のことであり、最後の神頼みでもある」とありますが、どのようなことを言っていますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 物事において成功するためには、どれだけ努力を重ねようとも結局のところ最後は「運」に頼るしかないので、努力をすること自体が無駄である、ということ。

イ 物事において成功するためには、努力こそが必要であり、成功を目指す人間にとって「運」に結果を委ねることは決してしてはいけない行為である、ということ。

ウ 物事において成功するためには、努力をし自分の才能を最大限に発揮させることによって、自分に巡ってきた「運」を逃さないようにする必要がある、ということ。

エ 物事において成功するためには、努力をするだけではならず、じっと自分の所に「運」が巡ってくることを待つ忍耐力こそが必要である、ということ。

問2

② に当てはまる最も適切な語を漢字二字で答えなさい。

問3

— 線部③「それでは、なぜ『鈍』であることが成功につながるのだろうか？」と筆者が述べるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「鈍」にはマイナスの意味しかないので、成功に必要なことであるように思えないから。

イ 「鈍」にはマイナスのイメージが付きやすいので、失敗することが前提になってしまうから。

ウ 「鈍」には積極的な意味が付け加わり、成功に必要なものへと変化したから。

エ 「鈍」には人が普段抱くのと異なる別のイメージが含まれているから。

問4 — 線部④「先があまり見えない方が良い」と筆者が主張するのはなぜですか。その理由を四十字以内で説明しなさい。

問5 — ⑤に入る熟語や慣用語の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「器用貧乏」や「多芸多才」

イ 「如才ない」や「沈黙は金」

ウ 「如才ない」や「空前絶後」

エ 「器用貧乏」や「多芸は無芸」

問6 — 線部⑥『『まわりに流されない』』ことによつてどのような利点が生まれますか。四十字以内で説明しなさい。

問7 — 線部⑦「成果を得ることを第一として、スピードと効率だけを追い求めて」とありますが、そのことによつて、どのような

結果を招く恐れがあると筆者は述べていますか。その答えを寺田寅彦の引用の中から「〜ということ。」につながるように最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問8 寺田寅彦の引用をしていることから、科学者という存在はどのようなものであるべきだという筆者の考えがうかがえますか。

次のア～エの選択肢の中から、その答えとして当てはまるものには○を、当てはまらないものには×をそれぞれ解答欄に記入しなさい。

ア 科学者は失敗を恐れずに行為の人になるべきである。

イ 科学者は先を見通す力さえあれば結果を出せる。

ウ 科学者は謙虚に大自然の教えを実践することを常に意識するべきである。

エ 科学者には大自然そのものを観察分析し、そこから推論を立てる力が必要だ。

問9 何かを成功させるために「運・鈍・根」以外にどのようなものが必要だとあなたは考えますか。それが必要な理由とともに百字

以内で答えなさい。

二

次の文章を読んで後の問に答えなさい。なお、本文には途中省略した箇所がある。字数制限がある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

高校三年生の白田<sup>しろたけい</sup>恵は音楽ライターになることを夢見ながらも満たされない高校生活を送っていた。そんな中、同じように音楽を心の支えとする辻本<sup>つじもと</sup>くんに出会う。音楽の話題で急接近する二人。そして辻本くんは自分が作った曲につける歌詞を作ることを恵に依頼する。思いがけない依頼に喜びながらもなかなか上手く歌詞を作ることができずに、恵は苦悩していた。

「あの時、掃除中に音楽の話で盛り上がったときさあ、本当に良かったって思ったんだ。何だろう、全然違う人は違う人で良いけど、同じ人は同じ人で嬉しいっていうかさ」

辻本くんのざらざらした声が、私の胸の芯<sup>しん</sup>に通っていった。私はただ「うん」と言った。陽は温かく身体を照らし、鼓動<sup>こどう</sup>は速いのに満たされた気持ちだった。

辻本くんがこちらを向いた。音楽を聴いていたときと同じ、感情の色がたっぷり入った目をしていた。

「俺、白田さんとずっと友達でいたいなーとか思っちゃった」

——あら？

まばたきして確かめてみたけれども、辻本くんはあくまで真顔だった。私は考えるより先に「友達？」と訊き返していた。辻本くんは目を丸くして「えっ」と言った。

「俺らまだ友達じゃないの？」

「いや、友達ですけど、現状」

「じゃ、いいじゃん！ 何が問題——」

さわやかに微笑んで私の肩を叩いた辻本くんは、途中で言葉を失った。手は宙で凍りつき、目はあさつての方向に泳いだ。泳いでから、すすすす、と私の顔に戻ってきた。<sup>②</sup> たぶん、夕陽の比じゃなく赤くなっている私の顔に。

あ、と辻本くんは言った。次に、わ、と言つて、それから二歩遠のいて叫んだ。

<sup>③</sup> 「わー！ ごめん！ や、ごめんじゃなくて！」

気付かせてしまった。好きとも言っていないのに。

私は恥ずかしくて、もう目の端は熱いし足元は頼りないし、その場に崩れ落ちそうだった。でも崩れ落ちてる場合じゃない。

「か、帰りますわ」

そつと足を動かして逃げだそうとした私を、辻本くんの腕がつかまえた。

「わあ帰らないで！ 明日から気まずいだろー」

まだあわてふためいた口調だった。本当に私を恋愛の範疇はんちゆうに入らない人として見ていたことが、痛いくらいにわかった。

「帰るー！」

もはや半泣きで私が言うと、辻本くんは自転車のところに走って行って振り返り、「じゃあ送るから！ な？」とやけになったように叫んで自転車を出した。

そうして私たちはお互い顔を真っ赤にしながら来た道に戻った。

辻本くんには、軽音部の一コマに彼女がいるという話だった。もつと早く言ってくれれば、と思っただけでも、そんなことは

<sup>④</sup> 言えなかった。彼女の名は吉井といい、ときどき耳にする気がしたけれども、一体どこで聞いているのか思い出せな

かった。

「……どんな子？」

来たときよりもつと重くなった会話の間を埋めたくて、訊きたくないのに訊いてみた。辻本くんは「わかんね」と投げやりに聞こえ



る返事をしたあとで、口の中でつぶやくように言った。

「パッと見、明るくて当たり前障りない感じなんだけど——でも何か違うんだ。わかんないところがあって、それでもっとわかりたくないような」

そうして辻本くんはこつちを見て、「あ、俺、喋りすぎっ」と笑った。初めて話して、その台詞を言ったときと同じように目尻が上がつて、それが余計かなしかった。自分が ⑤ 笑った。ぎこちない笑みになった。

ゆっくりゆっくり歩いたせいで、家に着くころにはもう日が沈みかけていた。辻本くんは自転車を私の手に預けると、淋しそうな顔で「じゃ」と手を振った。私は力なく手を振り返して家の門をくぐった。背中にずっと辻本くんの視線を感じていたけれども、目が合うのが怖かったので、振り向かないまま自転車を停めた。

家に入ると、すでにみそ汁のいいにおいがしていた。辻本くんの前では泣かなかったんだから、せめて部屋でひとり泣こうと思つたのに、お母さんの声が「遅かったじゃない。もうご飯よ」と言った。私はかばんを居間の隅に置いて、台所に向かって呼びかけた。

「お母さん。今日、志摩ちゃんちで食べさせてもらうからいらない」

「ごはんいらない、と言って部屋に閉じこもるような「傷ついてるんです、私」てなことをしたくなかったので、そう嘘をついた。

「志摩ちゃんち」と言えばお母さんはとやかく言わない。案の定、「えー、せっかく作ったのに」と文句を言っただけで、「じゃ、あんまり遅くならないうち帰ってくんよ」と許可が下りた。

さて、高架下の公園でも行こうか。コンビニでジュースでも買ってさ。

私がかばんから財布を取り出して玄関に出ようとする、ばたばたとスリッパの音が追いかけてきた。見ると、お母さんが一冊の本を持って立っていた。

「恵。ついでに姉さんにこの本返してくれる？」

「えー？」

姉さんというのはつまり、志摩ちゃんのお母さんのことだ。

「何でよ、ついでなんだからいいでしょ。志摩ちゃんに渡してくればいいから」

お母さんは「ほらー」と私に本を押しつけると、台所に戻ってしまった。⑥ 私は本に目を落としてため息をつく。本は「日本ロック

史'70s」とかいいう、ぶ厚い批評本だった。

### 《中略》

志摩ちゃんの家に着くと、明かりがついていなくて真つ暗だった。この家はお父さんもお母さんもバリバリ働く人で、志摩ちゃんは鍵っ子なのだ。志摩ちゃんが帰っていないければ、家が真つ暗ということもある。

——そっか、お母さんには誰もいなかったって言えば良かったんだ。

ほつとしてきびすを返しかけたところに、女の子の話し声が近付いてきた。

「……あ、うちここなんだ」

「へえ。かっこいいおうちだね」

私の少し先で立ち止まったのは志摩ちゃんだった。その隣には、保健室で見かける二年生の女子、志摩ちゃんに「才能あるよお」と屈託のない声で言ったあの子が立っている。彼女は「じゃ、明日ね」と志摩ちゃんに手を振って、私の横を通り過ぎていった。その瞬間、ふと鼻先から何かを感じた。おぼえのあるにおい、胸をつねる何か。志摩ちゃんが彼女の背中に向かって叫ぶ。

「ヨシイちゃん、気をつけてねえ」

ヨシイ？ —— 吉井。

少し前に聞いた、辻本くんと林くんの会話を思い出した。「でも、あいつが何て言うか」「吉井？ また保健室で寝てたよ」とか何とか。保健室の吉井。一コ下。

そうして私は、すれ違いざまに感じた彼女のおいが、埃ほじっぽい軽音部室のおいであることに思い当たる。⑦ 間違いない。

私は振り返ってその子の背中を見た。彼女は走っており、その後ろ姿はもうだいぶ遠かった。暗闇のなかで、街灯の明かりを映した黒い髪がゆらゆら揺れていた。

呆然と辻本ぼんくんの彼女を見つめる私を、後ろから志摩ちゃんまが呼んだ。

「恵ちゃん」

私は、硬直しかけた首をゆっくり動かして振り返った。街灯の明かりと明かりの間に、アスファルトの色に溶けそうにして、志摩ちゃんが立っていた。志摩ちゃんの右手には、八百屋やのビニール袋おが下がって、そこからにんじんの葉っぱらしきものが飛び出ている。バイクのエンジン音が聞こえ、遠くなっている。

うつかりと、涙がこぼれた。恵ちゃん、ともう一度志摩ちゃんまの呼び声がした。

⑧ 「ごめん、恵ちゃん」

次の瞬間には、駆け寄ってきた志摩ちゃんまが、私の腕を抱えていた。さっき、逃げ出そうとした私に辻本くんまがしたように。「私、知ってた。知ってました。ヨシイちゃんと辻本先輩のこと」

志摩ちゃんまが袋から取り出したのは、たまねぎとにんじんとじゃがいもだった。

「カレー？」

「シチューです」

CMみたいなピカピカのシステムキッチンで、志摩ちゃんまは包丁を取った。私はそれを、ダイニングテーブルに頬ほをつけたままぼんやり見ている。ダイニングの明かりは消されたままで、志摩ちゃんまの立つキッチンだけ、こうこうと蛍光灯に照らされていた。蛍光灯の下で、志摩ちゃんまはてきばきと材料を切って炒め、お湯を沸かした鍋なべに放り込んでしまった。そうして最後にちよつと火加減を見ると、手を洗ってからダイニングに出てきた。

志摩ちゃんまは私の隣の椅子に座り、テーブルの上の本を手を取った。

「あ、それお母さんが、おばさんに返してって」

志摩ちゃんは表紙をじっと見た後、ぱらぱらと中をめくって「血ですね」とつぶやいた。それから元に戻して言った。

「先輩から、『辻本』って名前聞いたときに、もしかしたらと思ったんです。後で、ヨシイちゃんの彼氏に会ったときクラス章見たら、やっぱり先輩と同じクラスで……」

「言っというてよ、それ」

出た声は細かった。それでも、誰もいない家の中では暗闇を通って響く気がした。スポットライトが当たったみたいなきッチンで、鍋のぼこぼこいう音がしていた。

「言えませんよ」

志摩ちゃんの幼い声が、少し震えた。

「言えません、そんな、私の友達の彼氏なんで手エ出さないで下さいなんて」

それで初めて、志摩ちゃんのポジションに気付いた。友達の彼氏に、幼なじみが恋している。完全に ⑨ だ。

#### 《中略》

「志摩ちゃん」

呼ぶと、志摩ちゃんはこちらに顔を向けた。私はいつものように言った。

「ねえ聞いてよ、志摩ちゃん」

どういう運びで辻本くんに振られたか、シチューが煮えるまで話した。足元の暗闇と、鍋のぐつぐつという音は、子守唄のようにやさしく私たちを包んだ。志摩ちゃんと話していると、自分ひとりでは言葉にできなかったものが言葉になった。

「届かない、って思ったの。私だけ、どこにも手を届かせられないんだって。なのにこんなに手を伸ばして、それがまた無様ぶざまだな、っっても思った」

志摩ちゃんはそのような私の愚痴をいちいち否定せず、黙ってウンウンと聞いてくれた。

一通り話し終えると、シチューができあがっていた。とろとろした、甘めのクリームシチューだった。胃の底から温まった。

私は食器を洗って、ごちそうさまを言い、志摩ちゃんちを後にした。アスファルトには冷えた空気が下り、さらした膝が少し寒かった。でも身体の底は熱くて、その温度差が不思議な高揚感を私に与えた。嬉しいでも悲しいでもないけれど、何か大声で歌いたような気分だった。けれども、この今の気持ちにしっくりくる歌は、私の膨大なはずのデータベースのどこにもなかった。あの曲は似てるけど何か違う、もう一つ違う……など、悩みながらふと一つのメロディーが引き出された。辻本くんの作った曲だった。

——あ。言葉が乗る。

二小節ばかり、こっそりと口にしてみた。それは唇を離れると、人気のない夜の道にすつと透き通って消えた。どきどきした。もう一度、同じ言葉で口ずさんでみた。もう一度。今度はもう少し先まで。そうだ。こうだ。

歌っているのに、歩調は速くなる一方で、私はずけずけと大股で歩きながら夜道に言葉を歌いこぼしていった。だんだん息が苦しくなると、途中で足を止めて深呼吸したりした。胸は速く打ち、頬は熱を帯びていた。さえた目に、冷たく澄んだ空気が染みだ。

私は目を閉じてすつと息を吸い込んだ。

「……とどーかなーいとどーかなーいゆーびがーちぎーれそーでーもー」

——サビの半分、できた。

目を開いて空を仰ぐと、電線の上に遠く空が広がっていた。街灯があるところはぼんやりと光にかすみ、明かりが途切れた辺りにはわずかな点、星が光る。

私は家に向かって走りだした。詞を完成させるために。

問1 ——線部①「陽は温かく身体を照らし、鼓動は速いのに満たされた気持ちだった」における「私」の気持ちを最も適切に説明し

ているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自分が必要としている辻本君に自分も必要とされていることがわかり、うれしく満足している気持ち。

イ 二人で盛り上がった「音楽の話」を辻本君も一生涯しやうがいの思い出と考えてくれることがうれしく満足している気持ち。

ウ 辻本君と自分と同じ信念のもとに音楽と向き合っていることがわかり、とてもうれしく満足している気持ち。

エ 辻本君が自分を「同じ人」であると言ってくれたことがうれしく、また辻本君と心が通い合っているように思えて満足している気持ち。

問2 ——線部②「たぶん、夕陽の比じゃなく赤くなっている私の顔に」とありますが、なぜ「私」は赤くなっているのですか。その

理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 思いがけなく、自分が辻本君のことが好きだということを知られてしまったから。

イ 計画していたとおりに辻本君のことが好きだと告白してしまったから。

ウ 友達ではなかったのに友達だと嘘をついたことを知られてしまったから。

エ 友達でいたいという辻本君の気持ちを知っていたのに、ずっと知らないふりをしていたから。

問3 ——線部③「わー!! ごめん!! や、ごめんじゃなくて!」とありますが、この言葉は辻本くんどのような気持ちを表してい

ますか。適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 君の気持ちに気が付いていなくてごめん!

イ 告白されたわけじゃないのに、さり気なく振ってしまっごめん!

ウ 無理に告白をさせちゃってごめん!

工 「ごめん」という言葉はいま言うべきじゃない言葉だ！ ごめん！  
オ 「ごめん」という言葉は簡単に使っちゃいけない言葉だ！ ごめん！

#### 問 4

④

⑤

に入れるのに最も適切な言葉を次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア あつかましくて    イ いたたまれなくて    ウ イライラして    エ 肩身が狭くて    オ はらわたが煮えくり返って

#### 問 5

——線部⑥「本に目を落としてため息をつく」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 家ではない場所で一人で泣くつもりで口実を作ったのに、母親から本の返却を頼まれたことで本当に志摩ちゃんの家に行かなくてはならなくなり、憂鬱ゆううつに感じている気持ち。

イ 混乱している気持ちを落ち着けるために志摩ちゃんの家に行くつもりだったのに、母親から本の返却を頼まれたことで余計な仕事が増え、負担に思う気持ち。

ウ 悲しみに打ちひしがれ、夕飯を食べる気にならなかったただけなのに、母親から本の返却を頼まれたことで、母親から全く心配されていないことがわかり、嘆き悲しむ気持ち。

エ 誰かに自分の気持ちを伝えたかったただけなのに、母親から本の返却を頼まれたことでそのきっかけを奪われてしまい、どこにもやり場のない切なさを感じている気持ち。

#### 問 6

——線部⑦「間違いない」とありますが、何が間違いないのですか。三十字以内で説明しなさい。

問7 — 線部⑧「ごめん、恵ちゃん」とありますが、志摩ちゃんはなぜ「恵ちゃん」(私)に謝ったのですか。その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 恵ちゃん(私)が辻本くんへ好意を寄せていることは知っていたが、恵ちゃん(私)の気持ちよりも、自分(志摩ちゃん)の心に寄り添ってくれる辻本くんの方が大切だと感じていたことが、恵ちゃん(私)に知られてしまったから。

イ これまでずっと仲良しだった恵ちゃん(私)が急に辻本くんと接近し、その結果自分(志摩ちゃん)だけが仲間はずれになった、その怒りを恵ちゃん(私)にそのままぶつけてしまったから。

ウ 恵ちゃん(私)が好意を寄せる辻本くんには彼女がいて、その彼女は自分(志摩ちゃん)の友達で、そして二人が付き合い合っていることを知っていたながらも、そのことを恵ちゃん(私)に伝えることができなかつたから。

エ 誰かが好きだという気持ちを優先させ、周囲の人の気持ちを顧みない恵ちゃん(私)の身勝手さに嫌気が差し、わざと恵ちゃん(私)の気持ちに気がつかないふりをしていたことが明らかになってしまったから。

問8 ⑨に入れる語として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア お調子者      イ 板挟み      ウ 独りよがり      エ 偽善者

問9 この作品の内容として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 好意を寄せる少年から頼まれた作詞をなかなか完成させることができないう主人公が、失恋をきっかけに自分の気持ちと向き合い、詞を完成させたいという意欲を持てるようになった。

イ 好意を寄せる少年に振られてしまい、何もかもがうまくいかないと嘆いている主人公に、幼なじみの志摩ちゃんの懐の深い人間性が深く突き刺さり、傷ついた心が次第に癒やされていく。

ウ 恋をすることで周囲が何も見えなくなっていた主人公が、失恋を通して自分がいかに多くの人に支えられているかに気が



つき、大人へと成長していく。

エ 日常の人との小さなやりとりのなかで勝手に傷ついていた主人公が、作詞を完成させるといふ本当の目的に気がつき、その目的のためになりふりかまわず突き進む決意を固めた。

**問10** 人が失敗から立ち直るためにはどのようなことが必要だとあなたは考えますか。自分の体験を元に具体的に百字以内で書きなさい。

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 地下鉄が東西南北をジウオウに走っている。
- ② 老舗のヒヤツカテンがその歴史に幕を閉じた。
- ③ お札をランパツした。
- ④ 一回表の攻撃で相手チームにセンセイされる。
- ⑤ 野球選手が現役をシリヅク。

問2 次の空欄を含んだ一語がそれぞれ対立した意味になるように、空欄に入る一字をそれぞれ漢字で答えなさい。

- ① 原稿を(ア) ( ) 小して紙を節約する。  
貧富の差が(イ) ( ) 大する傾向がある。
- ② 校庭が開(ア) ( ) される。  
小さい頃通った遊園地が閉(イ) ( ) された。
- ③ 高速道路の建(ア) ( ) ラッシュが始まった。  
アマゾン流域では火災により森林の破(イ) ( ) が進む。

④ 私が(ア) ( )憶している彼からはすっかり変わっていた。

思い出は(イ) ( )却のかなたに消えてしまった。

⑤ 軽(ア) ( )な行動はつつしんで下さい。

慎(イ) ( )に発言することが求められます。

以下余白

